

言語の意味と認知ドメイン

濱 田 英 人

0. はじめに

認知言語学の基本的な言語観は「言語は概念化者の認識作用を反映する」というものであり、言語の意味を概念化者の概念化にあるとする考え方である。このことは言語行為が人間の精神活動の重要な一部であり、人間の認識作用と切り離して考えることができないことから極めて自然な言語観であり、事態の参与者の中の誰（何）を主語にするのか、また、構文、時制、相、態等の選択等はすぐれて概念化者がその事態をどのように解釈（construal）するかに起因するといえる。

そしてこの視点から更に言えることは、概念化者がある対象を認識し、それを解釈するときには必然的に一定の視点からそれを捉えるという認知プロセスを伴うということであり、このことはたとえば次の卑近な言語表現からもうなずける。

- (1) a. The photograph is out of focus.
b. The photograph was awarded a prize. (Taylor 2002 : 442)

(1 a-b) では写真が話題になっていることは同じであるが、(1 a) では技術的な側面から記述対象である写真を捉えているのに対して、(1 b) では写真に写っている内容の審美的価値に視点があり、同一の指示対象であってもそれをどのような視点から解釈しているかという点で異なっている。認知言語学では人間が「もの」や「事態」を概念化するときには「形」や「材質」など「何ら

かの視点」からそれを捉えることから、これを「形の認知領域」「材質の認知領域」と呼び、その領域中でものや事態が解釈されると考える。つまり、「もの」や「事態」の概念化には様々な認知ドメインが関わっており、それが表現の意味に深く関わっているというわけである。更に例を挙げると、次の(2 a-b)は同一の実体が()で示される認知ドメインが前景化されることで意味が異なることを表している。

(2) a. Televisions need expert repairmen. (機能：受像機という機械)

b. Televisions look nice in family rooms. (形や大きさ：外見)

(ibid : 443)

このように認知ドメインは語や事態を概念化するために必要な背景知識であり、それに関わる複数のドメイン(ドメイン・マトリックス)の中の特定のドメインがそれが使われる文脈によって前景化し、それに応じて相対的に他のドメインが背景化するということが意味解釈に大きく関与しているということである。

小稿の目的は事例研究(case study)として認知ドメインの視点から言語の意味解釈や語や構文の意味拡張について考察することで言語のあり様を自然に説明できることを示すことである。

1. 語や構文の意味解釈におけるドメインからの分析の有用性

この節では言語の意味の考察に認知ドメインが大きな役割を果たすことを具体的な言語データを通して示す。

1.1. have の意味解釈と認知ドメイン

濱田(2009)では所有のhaveと存在のhaveについて考察し、haveが原義として有する「所有」という概念に関わる背景知識としてどのような認知ドメイ

ンが関与しているのかという視点から以下に挙げる五つのドメインを仮定し、そのドメインのうちのどれが前景化するかで have のもつ多義性をより自然に説明できることを述べた。つまり、have の意味をその複合ドメインのどの視点から事態を解釈するか(どの認知ドメインを焦点化するか)で have が典型的な「所有」を意味したり、「関係」を意味したり、あるいは「存在」を表すというわけである。

(3) 「所有」の構成概念と認知ドメイン

〈構成概念〉

〈関与している認知ドメイン〉

1. あるモノを所有するための行為action (D₁)
2. 獲得したモノを所有者の領域に保持する力controllability (D₂)
3. 所有者と所有物の間に成り立つある種の関係relation (D₃)
4. 獲得されたモノが所有者の領域にあるというlocation (D₄)
空間的位置
5. 結果状態としてのモノの存在existence (D₅)

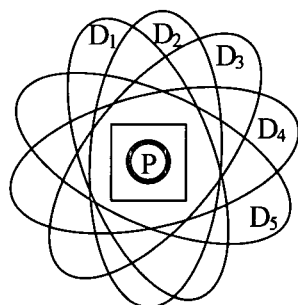


Figure 1

具体的には英語の have は未完了プロセス (imperfective) であるため認知ドメイン D₂ から D₅ が主に関わっており、この視点から have によって表される文主語 (tr) と目的語 (lm) の関係を見ると以下のように言えるのである。

(tr/lm の関係)

- (4) a. Be careful — The robber has a gun in his hand.

(immediate control の関係)

- b. John has a new computer. (potential control の関係)

- c. Sally has three grandchildren. (kinship (relation))

- d. Marvin has frequent headaches. (potential relation)

- e. Sheridan has brown eyes. (intrinsic relation)

- f. We have some vast open areas in the United States.

(location の関係)

- g. John has a lot of things to do. (existence)

(4 a) では文主語の *the robber* が目的語の *a gun* を実際に手にもっているということでそれを直接コントロールしており、この場合、文主語の意図性 (volitionality) も非常に高い。これに対して (4 b) では文主語の *John* がコンピューターを所有してはいるが、今手に持ってるということではなく、おそらく家かどこかにあるということで、使おうと思えばいつでも使えるという点で潜在的にコントロールしていると言える。このように controllability の度合いの違いはあるが、(4 a-b) で共通していることは文主語と目的語の関係はコントロールする側とされる側の関係であり、文主語の何らかの力の行使によって成り立っている関係であり、意図的な関係である。従って、(4 a-b) では共に「コントロールドメイン」が前景化し、その視点から事態が解釈されているのである。これに対して (4 c-e) では文主語が人間であるため、この意味で潜在的には意図を持ち得るが、ここでは意図性が感じられないことからコントロールドメインは背景化されており、文主語と目的語の間に成り立つ一定の関係概念 (relation) の視点から事態が解釈されていると言える。具体的には (4 c) は文主語と目的語の間に成り立つ親族関係 (kinship) を表しており、(4 d) は文主語と頭痛の関係であるが、これは常にある関係ではないという意味で潜在的关系 (potential relation) ということができる。また、(4 e) は文主語と髪の色

の関係で、譲度不可能という意味で *intrinsic* な関係ということができる。これに対して、(4 f-g) は文主語と目的語の *relation* を表していると捉えることもできるが、この場合の文主語が目的語の所在を表している点で、ここでは *location* と考えるのが妥当であると考えられる。このことは (4 f) の文主語 *we* は Langacker (1991) も指摘しているように 'people in general' ということであり、特定の人を指しておらず、この *we* はむしろ一種のメトニミー表現として、*we* から連想される空間を指していることから妥当性を有すると言える。更に、(4 g) では文主語 *John* は人間であり、この点で意図性を有し、目的語の *a lot of things to do* に対して *controllability* も関与し得るが、この文の自然な解釈は目的語の指示対象の存在であり、関与しているドメイン・マトリックスの中の「存在のドメイン」が前景化しているということができる。

そしてこのような分析の妥当性は次の (5 a-d) の *John has a gun (it, my gun)* という同一内容の意味解釈の違いが文脈によってどのドメインが前景化するかという問題に帰することができることから支持が得られる。

(前景化ドメイン)

- (5) a. Be careful — John has a gun in his hand. (immediate control)
 b. John has a gun in the drawer for use in self-defense.
 (potential control)
 c. A : Where is my gun?
 B : John has it. (location)
 d. John still has my gun in his car. (location or existence)

更に付け加えれば、次の (6 a) の *France* は権力の主体としての国家を意味しており、ドメイン・マトリックスの中の *controllability* が前景化されやすく、そのために「所有」の典型として理解されるのに対して (6 b) の *France* は国土を表しており、*controllability* のドメインは前景化せず、相対的に *location* や *existence* のドメインが前景化されるため *mountains* を位置付ける空間と

して理解されるのである。

(France の意味解釈と前景化ドメイン)

- (6) a. France has colonies in the Pacific. — 権力の主体としての国家
(controllability)
b. France has mountains in the east. — 国土 (location)

このように表現の意味をドメインメトリックスの中の特定のドメインの前景化に帰することは確かに言語のあり様を自然に説明できると考えられる。そこで次に、この視点から前置詞の多義性について考えてみる。

1.2. 前置詞の多義性と認知ドメイン

前置詞が多義的であることはよく知られており、従来は前置詞の多義性はメタファー的意味拡張として説明されることが多かった。事実、前置詞の 'in' は本来的には図2に示されるように空間的な位置関係、つまり、「ある領域に何かがある」というのが原義であり、このイメージ・スキーマをどのように見立てるかで (7 a-c) に示されるように様々な意味を表す。

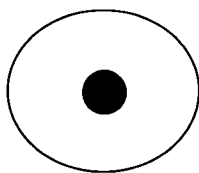


Figure 2 : IN のイメージ・スキーマ

- (7) a. The letter is in the box. (物理的空間のドメインが前景化)
b. The book will be published in September.
(時のドメインが前景化)
c. Jane is in a good mood. (心的空間のドメインが前景化)

具体的には（7 a）は原義通りの「空間概念」を表しているが、（7 b）では本来的に「空間」を表す 'in' が「時 (Time)」という抽象的な概念に用いられている。これは「空間」と「時間」は全く異なる概念であるが、何らかの「範囲」を表すという類似性を有するために「時間の流れ」を「空間の移動」に見立てて比喩的にすることが固定化したものであり、事実、このような比喩的表現が我々の認識に深く根ざしていることは次の（8 a-c）のような表現からも明らかである。

- （8） a. Christmas is coming around.
b. The end of the first semester is approaching.
c. The time will come when you will regret it.

そして、（9 a-c）に示されるように前置詞が「時」にも「場所」にも用いられるのはこのような認知作用によるものと言える。

- （9） a. at the station（場所）－ at 8:30（時）
b. on the street（場所）－ on Wednesday（時）
c. in the park（場所）－ in 2007（時）

しかしここで改めて何がこのメタファー的意味拡張を動機付けるのかを考えてみると、それは特定の認知ドメインの前景化であるということが出来る。つまり、あるものを別の何かに見立てる（たとえる）という認識作用は本来的ではない別の視点からそれを捉え直したときに初めて可能となるのであり、この別の捉え方の動機付けに特定の認知ドメインの前景化が大きく関わっているのである。そしてこの原理により（7 b）は「時のドメイン」が前景化され、その視点から解釈されているのである。このことは（7 c）でも同様であり、in は元々「物理的な空間の中」を意味するものであるが、「抽象的な心的空間」を物理的空間に見立てるというメタファーによって「ジョンが上機嫌という抽象的な空

間の中にいる」というような表現が可能となるのも「心的空間のドメイン」が前景化し、その視点から事態が解釈されるからであると言える。

そしてこの「空間のドメイン」と「時のドメイン」の前景化・背景化は‘be going to’の意味拡張にも当てはまる。

1.3. ‘be going to’の意味拡張

‘go’の意味は図3に示されるようにある実体(tr)が一定の領域から離れて行くことであり、基本的には(10 a)のように「空間の移動」を表している。しかし、‘go’には(10 b)に示されるように「状態変化」の意味もあることは良く知られていることであり、このことは図3をどのように捉えるかということに起因している。このように同一の事態をこの二つのどちらとして認識するかに関してはすでに池上(1991)で事態の「客観的把握」と「主観的把握」の視点から論じられているが、いずれにしても、「空間の移動」と「状態変化」が共通の概念構造を基盤とし、それをどのように捉えるかの違いであることは明らかであり、この認知操作の違いに帰することで(10 a)と(10 b)の‘go’の意味的な違いを自然に説明することが可能である。

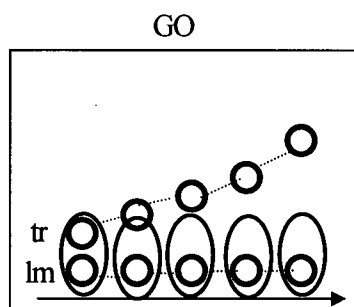


Figure 3 Langacker (1986 : 7)

- (10) a. John went to Boston to visit his friend.
b. The milk went sour.

では次に、(11 a) と (11 b) の 'be going to' の意味的差異はどのように考えることができるだろうか。

- (11) a. Are you going to the library? — No, I'm going to eat.
b. I am going to do my best to make you happy.

'be going to' は本来の「～へ行くところだ、行きつつある」という移動の進行の意味ばかりでなく、「～するつもりだ」「～しそうだ」という意図、予定、未来についての予測の意味も表すことは周知のことである。この 'be going to' の意味拡張に関して Hopper and Traugott (1993) は本動詞の go の進行形+目的の to 不定詞という本来的な意味から、「意図、予定、予測」という意味への文法化が語用論的推論 (pragmatic inference) を介して段階的に成立したものであると主張している。つまり、「～するために」という目的としての事態が発話時から見て未来に起こるという推論が働き、その事態の実現に向けての意志があることも同時に推論され、この読みが語用論的強化 (pragmatic strengthening) により 'be going to' の意味として固定化され、その結果、近未来を表す助動詞的な 'be going to' への再分析 (reanalysis) が起こったということである。

これに対して、Langacker (1999) はこの 'be going to' の文法化を主体化 (subjectification) に起因するものとして論じている。

- (12) a. Sam was going to mail the letter but couldn't find a mailbox.
b. Sam was going to mail the letter but never got around to it.
c. If Sam isn't careful he's going to fall off that ladder.
d. Something bad is going to happen — I just know it.
e. It's going to be summer before we know it.

(Langacker 1999 : 303)

上記の言語データでは、(12 a) は「手紙を出す」という未来の行為 (landmark)

を行うための文主語 (trajector) の物理的移動が意味されているのに対して (12 b) では文主語の物理的な移動はなく、「手紙を出す」という行為を行おうとする意図のみが表されている。更に (12 c) では物理的移動や文主語の意志はなく、可能性のみが表されており、文主語が to 不定詞によって記述されている事態の責任者であることは (12 a-b) と同じであるが、客体的意味はかなりの程度希薄化しているといえる。そして、(12 d-e) に至っては文主語の力は完全に薄れ、未来の事態に対する概念化者の予測を表している。Langacker はこのように 'be going to' の意味拡張が主体化により、元々の物理的移動の意味から移動の可能性、そして最終的には予測の意味へと変化したと主張し、この主体化の過程を次のように図示している。

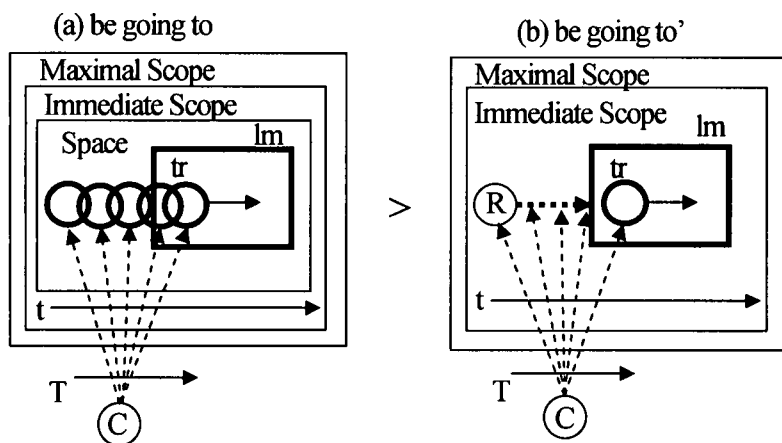


Figure 4 (Langacker 1999 : 303)

図 4 (a) は文主語である trajector の物理的移動を表しているのに対して、図 4 (b) は trajector の物理的移動はなく、現状を参照点 (R) として、それをもとに未来の事態を予測するという概念化者の心的な時間の移動を表している。

Hopper and Traugott (1993) や Langacker (1999) の分析は確かに十分説得力のあるものであり、論理的妥当性を有していると言える。しかし、ここで

改めて「語用論的推論」や「主体化」を動機付けるものは何かを考えてみると、そこにはやはり特定の認知ドメインの前景化と背景化という認知操作が関わっているように思われる。そこで、'go' の概念化に関与している認知ドメインについて考えてみると、この語がある領域から離れて移動するという「空間のドメイン」とその移動に必然的に関わっている「時のドメイン」が少なくとも関与していると言える。従って、この場合も先に前置詞の多義性で述べたように「空間の移動」と捉えるか「時の移動」と捉えるかという二つの捉え方が可能なわけであり、後者のドメインが前景化することで、be going to が予定の意味として解釈されるということができるのである。

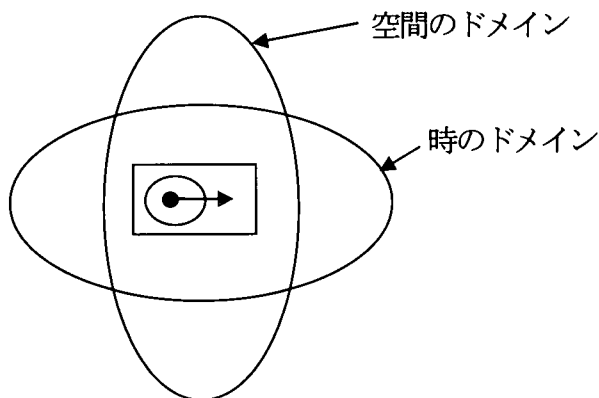


Figure 5

1.4. 過去形の意味と認知ドメイン

このように見てくると、認知ドメインは我々が世界の理解する認知基盤であり、上で述べた前置詞の意味解釈ばかりでなく、様々な言語現象に関わっていることは明らかである。そこでこの節では「過去形」の表す意味を認知ドメインの視点から見てみる。

認知言語学では「現在時制」「過去時制」の対立は認知領域の遠近概念が時間概念に投射されたものであるという捉え方をしており、例えば、次の (13 a) で

は概念化者が記述対象の事態を時間的に「近い」ものとして認識していることを表し、それに対して (13 b) は時間的に「遠い」ものとして認識していることを表している。

- (13) a. John is a student at this university.
b. John graduated in German at this university last year.

しかし、現在時制・過去時制がこのように現実世界の「時」とは限らずしも対応しないことは次の言語事実からも明らかである。

- (14) a. My ex-wife was Mexican. I don't know where she lives now.
b. If Bill took a taxi, he would have a better chance of getting there in time.
c. I hoped that you would give me some advice on this matter.

(14 a) では話者が別れた妻を心理的に遠いものと認識していることを、(14 b) では話者が「Bill がタクシーに乗る」という事態の実現可能性を遠い（低い）ものと認識していることを、そして、(14 c) では話者が相手 (you) と心理的距離を置くことで丁寧な表現となっていることをそれぞれ表している¹。従って、(14 a-c) から過去時制は話者が事態を何らかの点で遠いこととして認識してい

¹ そして更に言えば、図 6 がなぜ (14 b) のような否定的な意味につながるのかは以下の例から考えると自然に説明ができる。

- (i) a. That is outside my field.
b. The lecture is beyond my comprehension.
c. His remark is beyond my endurance.

(i a-c) では *outside*, *beyond* という表現が用いられているが、これはまさに図 6 のように何かが領域の外にあることを表しており、それぞれが「それは私の専門ではありません。」「その講義は私の理解を超えている(理解できない)」「彼の言葉は私の我慢を超えている(我慢できない)」と否定の解釈をもつ。つまり、何かが領域の外にあるという認識は確かに否定の概念と結び付いているのである。

ることを表しており、これを図示すると図6のようになる。

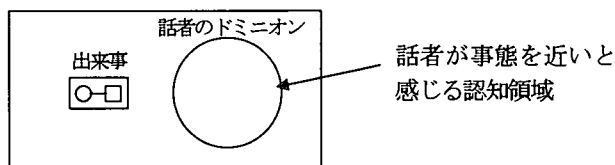


Figure 6：過去形のイメージ・スキーマ

そしてここで重要なことは、この図6に示される過去形のイメージ・スキーマがどのような認知ドメインが前景化して解釈されているかということであり、その活性化ドメインによって意味が異なっているということである。

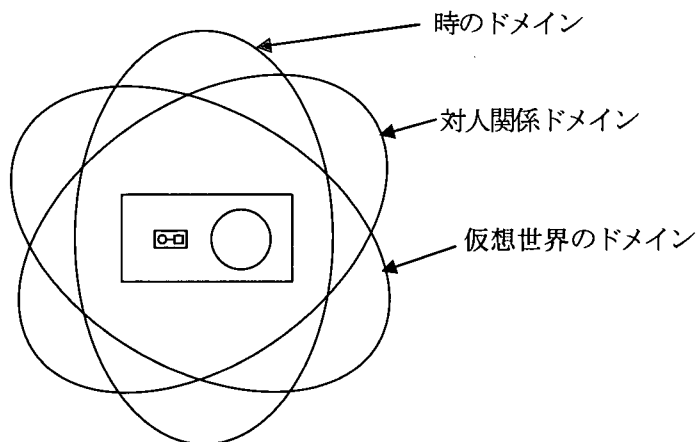


Figure 7

1.5. 第4文型・第3文型と認知ドメイン

Langacker (1986, 1991) は第3文型と第4文型の表現の違いを同一のベースのどの部分に視点を向けるかの違いとして分析している。

- (15) a. John sent a Christmas card *to Mary*.
 b. John sent *Mary* a Christmas card.

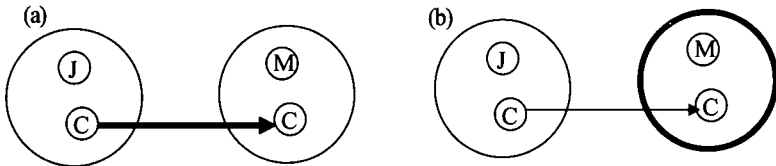


Figure 8 (Langacker 1986 : 14)

つまり、図 8 (a) のように移動 (path) が目立って認識されれば第 3 文型として言語化され、図 8 (b) のように所有関係が目立って認識されれば第 4 文型として言語化されるというわけである。そしてこの分析は次の言語事実を正しく予測することができるという点でも妥当性を有している。

- (16) a. I sent Harvey the walrus.
 b. *I sent Antarctica the walrus. (Langacker 1991 : 360)

つまり、(16 a) では *Harvey* は *the walrus* の所有者として解釈できるために容認可能であるが、(16 b) では *Antarctica* は「場所」として解釈され、*the walrus* の所有者としては解釈され難いため容認不可能となると説明することができるのである。

そしてこの Langacker の分析から更に言えることは、第 4 文型と第 3 文型では何を primary landmark として認識しているかという点で異なっているということである。つまり、次の (17 a) では *John* が trajector であり、*Mary* が primary landmark であり、(17 b) では trajector は同一であるが、primary landmark は *a book* であるということである。

- (17) a. John gave Mary a book.
 b. John gave a book to Mary.

これはそれぞれ問題になっている要素の距離が話者の認識を反映しているからであり、言い換えると、(17 a) は話者が「*John* と *Mary* の間で何が起こったのか」ということに関心があり、(17 b) では「*John* は *a book* をどうしたのか」ということに関心があるということである。そこで、このような解釈が何に起因するのかを考えてみると、それはこの構文の概念化に関わっている認知ドメイン・マトリックスとその中のドメインが前景化しているかということであると言うことができる。

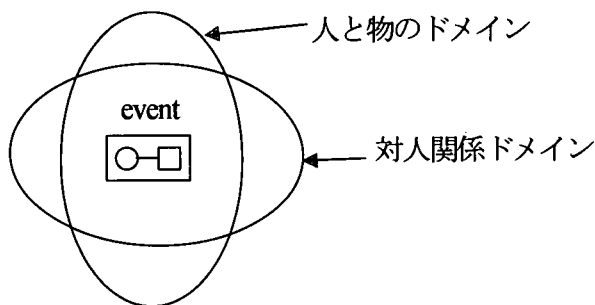


Figure 9

そしてこの分析の妥当性は以下の言語事実からも支持が得られる。つまり、(18 a-b)、(19 a-b)で第4文型だけが容認可能となるのは *a kiss*, *a hand* が「モノ」ではなく、いわゆる出来事名詞 (eventive noun) であり、そのために「対人関係ドメイン」が前景化した解釈しか成り立たないからである。

- (18) a. Mary gave John a kiss.
b. *Mary gave a kiss to John.
- (19) a. Mary lent John a hand.
b. *Mary lent a hand to John.

また、次の (20) から (22) に示されるように 'suggest'、'explain'、'report'

で第3文型のみが容認可能となるのは、(20 c)、(21 c)、(22 c)でこの種の動詞では間接目的語を言語化しなくても容認可能であることも分かるように「対人関係ドメイン」が前景化し難く、相対的に「人と物のドメイン」が前景化しやすいからであると言える。

- (20) a The scientist suggested an important plan to the President.
 b. *The scientist suggested the President an important plan.
 c. The scientist suggested an important plan.
- (21) a. John explained the problem to the children.
 b. *John explained the children the problem.
 c. John explained the problem.
- (22) a. Bill reported the accident to the captain.
 b. *Bill reported the captain the accident.
 c. Bill reported the accident. (小西 1980)

そして更に付け加えると、第4文型では間接目的語を主語にした受動文(23 a-e)が容認可能であるのに対して、直接目的語を主語にした受動文(14 a-e)が容認され難いのは、第4文型が概念化者によって「対人関係ドメイン」が前景化されている場合の表現形式であるからであるという問題に帰することができるのである。

- (23) a. Frank was sold a car which turned out to be a lemon.
 b. Mary was sent the letter.
 c. The child was told a bedtime story.
 d. John was offered a post in the administration.
 e. Robin was promised an early departure. (奥野 1989 : 107)
- (24) a. ?*A book was given John.
 b. *A car was sold John.

- c. *A record was given Anne.
- d. *A telegram was sent Robert.
- e. ?The book was given Mary.

(ibid.)

2. 因果関係ドメインと意味拡張

前節では言語の意味解釈に認知ドメインが大きく関わっていることを述べた。認知ドメインとは我々が語や事態を概念化する認知基盤であり、またそうした語や事態を解釈する背景知識である。認知ドメインには「形」「色」「重さ」「機能」などモノの存在そのものに関与するものもあれば、「時のドメイン」「対人関係ドメイン」など事態に関与するものもあり様々であるが、いずれにしても我々がある実体 (entity) を概念化する場合には様々な認知ドメインを喚起し、その実体を解釈しているのである。

そこで、これまで挙げてきたドメインの他にどのようなドメインが意味解釈に関与しているのかを考えてみると、我々が世界を認識する最も基本的なドメインの一つとして「因果関係ドメイン」が挙げられるように思われる。事実このことは、Murao (2009) が結果構文の分析において「因果関係ドメイン」をこの構文を特徴付ける中心的ドメインとして位置付け、また、Hopper and Traugott (1993) が元来は (25 a) のように二つの事態の時間関係を表していた *since* が、(25 b) のように理由を表わす用法を発達させことを、意味的・語用論的傾向 (semantic-pragmatic tendency) の一つである「ある状態に対する話者の主観的な信条や態度などを中心に表す意味」への意味拡張の例として挙げていることから、この「因果関係ドメイン」が事態解釈に大きな影響を与えていることは確かである。

- (25) a. I have done quite a bit of writing since we last got together.
(temporal)

- b. Since I have a final exam tomorrow, I won't be able to go out

tonight. (causal)

(Hopper and Traugott 1993 : 74)

つまり、*since* のように本来的に時間関係を表す二つの事態が主観化によって新たな意味を派生する場合、概念化者がそれを特定の視点から捉え直すことを動機付けるものが必要であり、(25 b) の意味は「因果関係ドメイン」が前景化され、そのドメイン上で二つの事態を解釈するという概念化者の認知プロセスが深く関わっていると言えるのである。

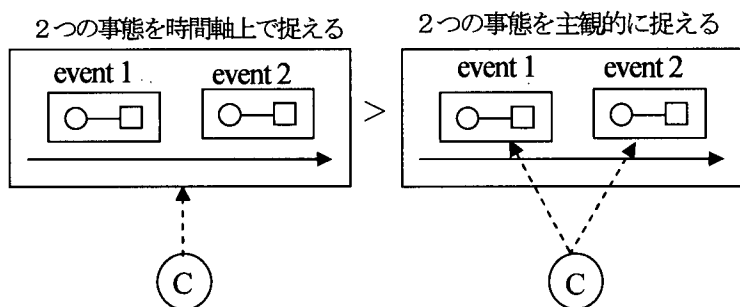


Figure 10

そこで以下では、この「因果関係ドメイン」が我々が実体 (entity) を解釈する上で基本的かつ重要なドメインであることを *by* の意味拡張と現在完了を例に述べたい。

2.1. *by* の意味拡張と認知ドメイン

by の原義は次の (26 a-b) に例示され、図 11 に示されるように「二つの実体が近接関係にある」ということであり、空間的な関係を表すものである。つまり、二つの実体が「空間ドメイン」上で解釈されるということである。

(26) a. Johnson was standing *by* the window.

b. You should always have a dictionary *by* you.

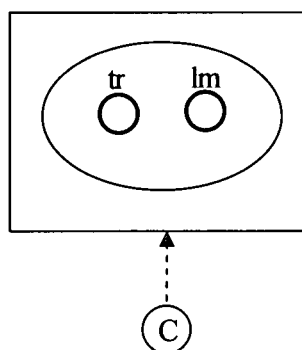


Figure 11 : by の基本イメージ・スキーマ

しかし、by は他の前置詞と同様に多義的であり、その多義性は図 12 に示されるように概念化者の認知プロセスが前景化し意味を担う主体化（subjectification）に起因すると考えることができる。

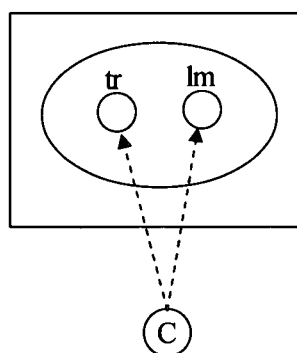


Figure 12

つまり、二つの実体の近接関係に何らかの意味付けをするという認知プロセスであり、具体的にはこの by の意味拡張には「因果関係ドメイン」が前景化され、そのドメイン上で二つの実体を解釈するという認知プロセスが関与していると考えられる。つまり、「AとBの近接関係」は「AとBが密接な関係にある」と

いう認識を喚起し、それが「因果関係ドメイン」の前景化を動機付け、その結果、以下のような解釈の連鎖が形成されると考えることは全く自然である。

- (27) 二つの「もの」の空間的位置関係から因果関係への認知プロセス
「AとBがすぐ近くにある」→「AとBが密接な関係にある」→
「AがBと関係付けられて起こる」→「BがAの行動を動機付ける」→
「BをAの「原因」「原動力」、そして「動作主」として認識する」

「AとBがすぐ近くにある」という原義から概念化者が「AとBの様々な関係」を想起するという認知プロセスによって「AがBと密接な関係にある」、「AがBと関係付けられて起こる」という認識が生じ、「BがAを動機付ける」という解釈が生まれ、その結果、(28 a-d) に示されるように「原因」「原動力」、そして「動作主」の意味でも使われるようになるということである。

- (28) a. I was moved to tears just by thinking about it.
b. Mary passed the examination by working hard.
c. The engine is driven by steam.
d. The play was written by Shakespeare.

このように概念化者が二つの実体の空間的近接関係から他の関係概念を想起するに「因果関係ドメイン」の前景化がその動機付けとして大きな役割を果たしていることは確かであるが、このことは二つの事態の関係にも当然あてはまると考えられる。そこで、以下ではこのことが概念化者がある事態を過去形で言語化するのか、現在完了で言語化するのかという場合の認識の違いにも当てはまることを述べたい。

2.2. 現在完了で表現された事態の認知プロセス

濱田 (2004) では現在完了とは次の (29 a-d) に示されるように「話者が自分

の経験領域に事態をもっている」ということを表す表現形式であると特徴付けた。

- (29) a. Please excuse my dirty clothes. I've worked in the garden.
b. I have to use the stairs. The lift has broken down.
c. Two prisoners have escaped from Dartmoor. They used a ladder which had been left behind by some workmen, climbed a twenty-foot wall and got away in a stolen car.
d. We have waited all day. (We are still waiting.)

つまり、(29 a-b) では話者は現在の状況を説明するために過去に起こった事態に言及したり、(29 c) のように過去に起こった事態を話題 (topic) として現在の談話空間 (current discourse space) に持ち込んだり、また、過去に始まり現在に至る状況を述べたりするために現在完了を使用しており、どの場合にも共通していることは現在完了という表現形式はそれによって表される事態が話者の経験領域 (あるいは現在の談話空間) に存在するということによって動機付けられるということである。そしてこのことは「過去に起こった事態が現在 (発話時) にも有効であるという話者の認識」に基づくものであり、また、過去に起こった事態というのは固定され変化しないため、それはいわばいつでも取り出せるということであり、'have' という語によって喚起される「現在の談話空間 (current discourse space)」にそれを投射したものが現在完了と呼ばれるものの本質だということである。そこで、この現在完了を動機付ける話者の認識を図示すると図 13 (次頁) のようになる。

しかし、ここで改めて考えてみると、過去や過去に端を発する事態が現在の談話空間に投射されるというとき、それを動機つけるものは何かということが問題として残る。結論的にはこのことは図 14 に示されるように「話者がその過去の事態と現在の状況を因果関係で捉える」という認知的操作に起因すると考えることができる。我々があるモノや事態を知覚し、そこにもう一つのモノや

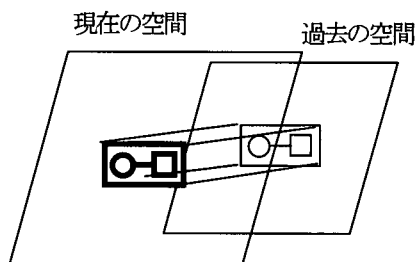


Figure 13 : 現在完了のイメージ

事態の存在に気付くという状況があった場合、それを互いに関連付けるということは我々が日常的によく経験することであり、このようなことは人間の基本的な認識作用の一つであるということである。

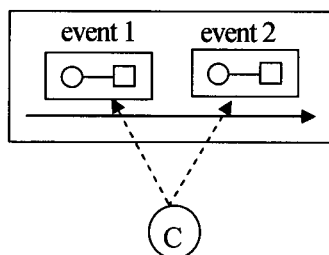


Figure 14

更に付け加えると、この認知操作は上の図中の event 1 と event 2 をどのような視点から解釈しているかということであり、どの認知ドメインが前景化しているかということである。つまり、図 15 に示されるように event 1 と event 2 を「時のドメイン」で捉えたと、その場合には二つの出来事の生起順序に視点が向けられるため、event 1 は過去時制で表現され、「因果関係ドメイン」が前景化し、その視点から二つの出来事が解釈されると event 1 の「過去性」は希薄化し、それが現在の状況の原因を表しているという認識が前面に押し出されるわけである。

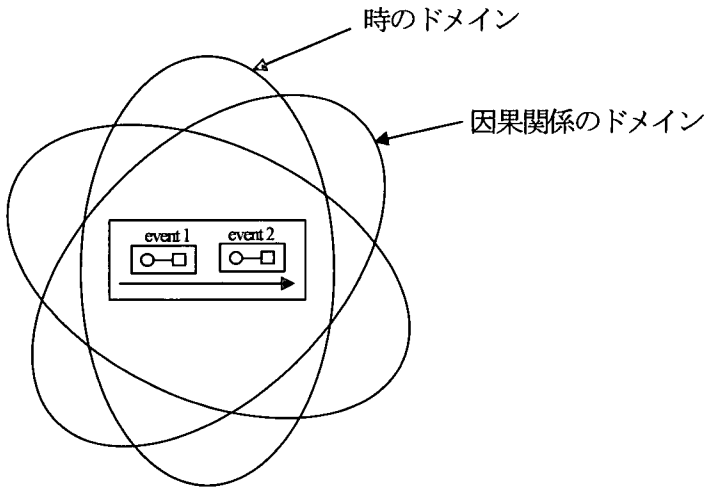


Figure 15

たとえば、このことを (30 a-b) を例にすると、(30 a) で *I've worked in the garden* が過去の事態であるにも関わらず、現在完了で言語化されているのは「衣服が汚れている」という今の状況と「庭仕事をしていた」という過去の事態を因果関係で捉えているからであり、また、(30 b) で「ジョンがひどい自動車事故を起こした」という過去の事態が現在完了で表されているのは、言語化されていない現在の状況（たとえば入院中など）を因果関係で捉えているからである。

- (30) a. Excuse for my dirty clothes. I've worked in the garden.
b. John has had a bad car crash.

このように我々の複数のモノや事態の認識では「因果関係ドメイン」を前景化し、その中で互いの関係を理解するということは極めて一般的なことであり、このドメインの存在が言語の意味拡張に大きな影響をもつと考えるは自然なことであると言える。

3. まとめ

これまで述べてきたように認知ドメインは我々がモノや事態を概念化した、理解したりする際に必然的に関わっている認知基盤であり、背景知識である。従って、モノや事態を言語化する場合には、一見そうした指示対象のみを問題にしているように見えるが、実はその概念化の過程には関与するドメイン・マトリックスの中の特定のドメインを前景化して、その実体 (entity) を捉えるという認知作用を伴っているわけである。言い換えると、このような捉え方 (つまり、解釈 (construal)) がその表現の意味を決定付けるわけである。たとえばこのことは、名詞が動作化されて動詞の意味を担う場合にも当てはまるのであり、名詞の概念化に関与する特定のドメインが関わって (つまり、前景化して) その動詞の意味が決定されるということである。更に言えば、モノを概念化する場合には「形」「大きさ」「重さ」「機能」「材質」等様々なドメインが関わっているが、我々が何をそのモノの概念の中核として認識しやすいかということからすると、一般的には「機能」や「形」であり、事実、このことは (31 a-i) から裏づけられる。

- (31) a. chain : 鎖状になる、～を鎖でつなぐ
 b. ball : 球状にする、丸く固める
 c. fork : フォークで持ち上げる、フォークの形にする
 d. box : ～を箱に入れる (詰める)、～に箱を取り付ける、～を箱 (形) にする
 e. fax : ファックスで送る
 f. video : ビデオに録画する
 g. lamp : 〈物〉を照らす
 h. house : (人や建物が) 〈人〉を収容する、泊める
 i. bottle : ビンに詰める

先にも述べたように言語行為が人間の精神活動の重要な一部であり、人間の認識作用と切り離して考えることができないとすると、その認知基盤である認知ドメインを議論することなく言語を考えることはできない。また、それが人間の認識の根本を支えているものであるとすると、そのドメインが原理的には無数にあるとしても、ある限られた認知ドメインを仮定し、そこにモノや事態の解釈の傾向性を捉えることもできるように思われる。その一例が2節でみた「因果関係ドメイン」であり、このドメインは人間の認識作用の傾向性を明らかに反映しているように思われる。また、Tomasello (1999) ですでに指摘されているように、言語習得が一見、語彙の習得のようであっても、たとえば、‘give’であれば、「授与する人」「授与される人」「授与される物」も同時に習得されるという事実から、この語の習得に図9で示した二つのドメインが関与していることも明らかである。そこで、残された問題として小稿での事例研究を更に押し進め、人間の認識作用の一般的傾向性を認知ドメインの視点から考察し、その認知メカニズムを明らかにすることが考えられるが、このことは今後の課題としたい。

References

- Hamada, Hideto. 2002. *Grammar and Cognition*. Kyodo Bunkasha.
- 濱田英人. 2004. 「認知言語学と英語教育」『文化と言語』札幌大学外国語学部紀要 第61号.
- Hamada, Hideto. 2008. *Grammar of the English Language*. Kanai Insatsu.
- Hamada, Hideto. 2009. Possession and Existence: The Conceptual Nature of Have and There Constructions. 『英文学研究 支部統合号』vol.II.
- Hopper, Paul and Elizabeth Close Traugott. 1993. *Grammaticalization*. Cambridge: Cambridge University.
- Ikegami, Yoshihoko. 1991. ‘DO-Language’ and ‘BECOME-Language’: Two Contrasting Types of Linguistic Representation. *The Empire of Signs*.

- John Benjamins Publishing Company. Amsterdam/Philadelphia.
- 小西友七編. 1980. 『英語基本動詞辞典』研究社.
- Langacker, Ronald, W. 1986. An Introduction to Cognitive Grammar. *Cognitive Science* 10: 1-40.
- Langacker, Ronald. W. 1987. *Foundations of Cognitive Grammar*, vol. 1: *Theoretical Prerequisites*. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald. W. 1991. *Foundations of Cognitive Grammar*, vol. 2: *Descriptive Application*. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald. W. 1993. Reference-Point Constructions. *Cognitive Linguistics* 4. 1-38.
- Langacker, Ronald. W. 1999. *Grammar and Conceptualization*. (Cognitive Linguistics Research 14.) Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Langacker, Ronald. W. 2008. *Cognitive Grammar A Basic Introduction*. Oxford University Press.
- 奥野忠徳. 1989. 『変形文法による英語の文型』東京：開拓社.
- Murao, Haruhiko. 2009. *Cognitive Domains and Prototypes in Constructions*. Kuroshio Publishers.
- 中右 実. 1998. 「空間と存在の構図」『構文と事象構造』日英語比較選書 5. 研究社.
- Taylor, John. 2002. *Cognitive Grammar*. New York: Oxford University Press.
- Tomasello, Michael. 1999. *The Cultural Origins of Human Cognition*. Harvard University Press.